

東海支部においては、ここ数年一定数の参加者確保のため、幹事や各企業の代表者が大変苦勞する状況が続いておりました。そこで、場所をホテル宴会場から街中のレストランの貸切に変更するなどし、会費の大幅削減を図った結果、多くの会員から早々の参加申込があり、さらには当日3名もの方が飛び入り参加されるなど、盛大な会合となりました。また、少々小さめの会場であったことから、歓談の声が会場内に響き渡り、これまでになく賑やかな雰囲気と

なりました。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、次回幹事となる(株)デンソーの塚本晃氏(通昭60)から次回総会への決意を表明していただき、盛会を誓い合いました。会の最後は恒例の「青葉もゆるこのみちのく」を合唱した後、常任幹事の森正和先生(子昭48)による閉会の辞で締めくくりました。

以上、電気系同窓会会員皆様のご健勝を祈念しつつ、東海支部の報告といたします。

退職教授のご紹介



**亀山充隆先生
ご退職**

情報科学研究科情報基礎科学専攻知能集積システム学分野の教授として研究と教育に尽力された亀山充隆先生が、平成28年3月31日をもって定年により本学を退職されました。

先生は昭和25年5月12日に栃木県宇都宮市にお生まれになり、宇都宮高校を経て昭和48年3月に東北大学工学部電子工学科を卒業され、その後同大工学

研究科修士課程に入学され、昭和53年3月に電子工学専攻博士課程を修了されました。同年東北大学工学部助手に採用され、昭和56年助教授、平成3年教授に昇任されました。平成5年4月に情報科学研究科が創設され、本研究科教授として移籍されました。研究科長を平成22年4月から平成26年3月まで務められ研究科の研究・教育環境の整備などの管理運営にも多大の尽力をされました。

先生はリアルワールド応用知能システムのためのVLSIコンピューティングに関する研究分野を創始され、環境認識、予測・推定、行動計画といった多種多様な処理をリアルタイムで行うためのVLSIコンピューティングプラットフォームとその最適構成理論を提唱されました。さらに、多値マ

ルチプレクサロジック、2線式電流モード多値集積回路、局所演算性に基づく高並列多値演算回路、リアルワールド環境に適応した最適アルゴリズム選択、マイクロパケット転送に基づくダイナミックリコンフィギャラブルVLSI、非同期方式を活用したパワーゲーティング及び電源電圧自律選択、低電力多値リコンフィギャラブルVLSIなど、新概念を有する数々の先駆的研究をされました。

以上のような研究業績に対して、IEEE Technical Committee on Multiple-Valued LogicよりOutstanding Paper Award、計測自動制御学会技術賞、日本ロボット学会技術賞、電子情報通信学会論文賞、IEEE Fellow、電子情報通信学会フェロー、情報処理学会フェローなど多数の賞を受賞されています。学会及び社会等の活動においては、計測自動制御学会常務理事・論文集委員会委員長、IEEE MVL TC Chair、電子情報通信学会集積回路研究会専門委員長、Associate Editor of IEEE Transactions on Computers、電子情報通信学会東北支部長、情報処理学会東北支部長、大学設置・学校法人審議会専門委員、大学評価・学位授与機構学位審査会専門委員、日本学術会議連携会員などを務められました。

先生はご退職後も石巻専修大学にて教育・研究活動を続けておられます。今後のご健勝とご活躍を祈念致します。(張山昌論 記)



**松木英敏先生
ご退職**

医工学研究科生体電磁波医学分野(工学研究科電気通信工学専攻兼担)の教授として、研究と教育にご尽力されました松木英敏先生が、平成28年3月31日をもって定年により退職されました。先生は宮城県でお生まれになり、昭和48年3月に同大理学部物理学科を卒業され、その後工学研究科博士課程後期3年の課程を経て、昭和55年3月に

工学博士の学位を取得されました。同年4月、東北大学工学部電気工学科に助手として着任され、平成10年2月に東北大学大学院教授(工学研究科)に昇任されました。その後、本邦初となる医工学研究科の設立に尽力され、平成

20年4月の東北大学大学院医工学研究科新設と共に同研究科教授となり、平成23年3月に発生した東日本大震災直後の平成23年4月から3年間は同研究科長をお務めになりました。設立間もない医工学研究科の運営に加えて、震災被害の復旧、復興に向けての様々な場面で研究科長として陣頭指揮を執られました。本医工学研究科が現在も尚、高い評価を得て活動を継続できているのも、先生のご尽力の賜物です。

先生のご研究は、電気工学、磁気工学、照明工学、医工学等に関する幅広い分野にわたりますが、一貫して磁気学に基礎を置く「電磁エネルギー変換工学」の発展の歴史となぞらえることができ、新しい「生体電磁工学」を興されたことと評価されております。中でも「感温磁性流体」の応用研究は、がんに対するハイパーサーミアに展開される事となり、医学界からも注目されました。また電気回路のLSI化を

進める上で、インダクタの小型化は困難であるとされていた定説を覆し、電気回路と磁気回路を「織物構造」とすることで、特性を劣化させずに小型化できる・ことを主張され、当時最薄のインダクタを世界に先駆けて実証されました。これは、電磁エネルギー変換回路を考える上で独創的な手法であり、先生はこの考え方を「分布磁界の制御」と表現され、様々な分野に適用され、新しい応用分野の開拓に貢献されました。これらの研究成果の波及効果は著しいものがあり、先生の基礎技術は特許化されるとともに、現在では、小型電子機器から医療用機器、照明、電気自動車、などの幅広い分野における画期的な技術として注目され、「ワイヤレス給電技術」の主要な方式のひとつとして広

く発展を続けています。

以上のような研究業績に対しまして、電気学会業績賞、日本磁気学会賞を始め、多数の賞を受賞されています。学会活動においては、日本磁気学会会長、照明学会会長などとしてそれぞれの学会の発展に多大な貢献をされています。先生は生体電磁工学の創生から発展、「学際工学」の融和を図る大切さを常に教示され、温厚なお人柄と共に学生からも大変慕われてきました。ご退職後も、東北大学未来科学技術共同研究センター次世代移動体グループのリーダーとしてご尽力されております。これまでのご指導、ご鞭撻に心より感謝申し上げますと共に、今後の先生のご健勝と益々のご活躍をお祈り申し上げます。(佐藤 文博 記)



安達文幸先生 ご退職

工学研究科通信工学専攻コミュニケーション工学講座の教授として研究と教育に尽力されました安達文幸先生が、平成28年3月31日をもって定年により本学を退職されました。

先生は昭和25年4月に新潟県柏崎市でお生まれになり、昭和48年に東北大学工学部電気工学科をご卒業された後、電電公社(現NTT)に入社され、その後

NTTドコモに転籍し、平成12年1月に教授として大学院工学研究科にご着任されました。先生はNTTドコモ在職中に、世界中で使われているW-CDMAと呼ばれる第3世代(3G)携帯電話システムを開発されました。

先生のご専門は移動体無線通信工学であり、東北大学にご着任以来、周波数領域等化技術等数々の研究業績を残されました。これらの研究成果は、現在4Gシステムと呼ばれるLTEなどで用いられております。

先生の業績に対して、2004年には国際的に活躍する日

本人科学者16人の1人に選ばれトムソン・リサーチフロントアワードを授与された他、電子情報通信学会業績賞、IEEE VTSアバンギャルド賞、電波功績賞・総務大臣表彰、内閣総理大臣発明賞やC&Cアワードなど、数々の賞を受賞されました。

学内では、ディスティンディングイシュープロフェッサーを務められた他、情報知能システム(IIS)研究センター長、国際高等研究教育院情報・システム領域基盤長、文科省GCOEプログラム研究代表者も務められました。さらに、学会では、電子情報通信学会副会長、IEEE仙台支部長などを歴任されました。

先生は、誰とでも気さくにお酒を酌み交わされ、多くの国内外の研究者や学生から慕われております。また、最近は毎日10000歩以上歩かれており、若いころと変わらぬ体型を維持されております。

先生は、退職後も東北大学電気通信研究機構にて、耐災害ICTや5Gシステムの実現に向けた研究をされております。先生のご健勝とますますのご活躍をお祈り致しますと共に、今後も変わらぬご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。(工藤 栄亮 記)

追悼

大見忠弘先生を偲んで

工学研究科 教授 須川 成利



東北大学名誉教授大見忠弘先生は、平成28年2月21日にご逝去されました。享年77歳でした。

大見先生は、昭和14年1月10日東京都でお生まれになりました。昭和41年3月東京工業大学大学院理工学研究科電子工学専攻博士課程を修了後、同工学部電子工学科助手に任用されまし

た。昭和47年4月に東北大学電気通信研究所に助手として着任され、昭和51年12月には助助教授、昭和60年1月に

は工学部教授に昇任されました。工学部では、電子工学科の固体電子工学講座を担当されました。平成10年4月には東北大学に新設された、未来科学技術共同研究センターにおいて未来情報社会創製分野を担当されました。平成14年3月に、定年により一旦退官された後も、新半導体・ディスプレイ産業創製寄付研究部門にて引き続き研究・教育に邁進されました。

大見先生は、半世紀にわたり、半導体集積回路技術に関する体系的な研究を推進してこられました。将来の半導体技術のあるべき姿を常に洞察し続け、その具現化に必要な技術開発を一貫して行って来られました。世界に先駆け、「ウルトラクリーンテクノロジー」の概念を提唱され、その実現に必要なありとあらゆる技術すべてを自ら作り上げら